

紀州、路地、肉体労働、火事、殺人、血族、男、女、兄、母、義父、姉、実父、妹、性器が心臓ならば一番よかつた！ラストのスピトクレッションドぐんぐん高まる血液フォルテツシシシシモに鳴り響くトランペット鮮烈な光搖らぐ世界美しき詩情ほとばしる官能銃弾が肺に穴開け放心しながら本閉じ表紙を眺めると僕の手の中にはへ中上健次へ岬へ文春文庫へという明朝体の文字があるだけでした。いや、正確には僕の手さえもそこにはなく、ただ何もない空間に文字がぴたりと存在しているのです。本の感触はある。文庫本のつるつるとした感覚は確かにある。しかし僕にはそれが見えません。ページをぱらぱらめくつてみと、空中に文章の固まりが出現します。僕がページをめくる感触に合わせて、その固まりも本のページに張り付いているように動き、別の固まりが出現するのです。僕は本を放り出しました。それはたぶん床に落ちたのでしょう。乾いた音を立てました。相変わらず虚無な空間が広がっていますが、へ岬へでかでか書かれた書名で場所は判る。立ち上がつて周りを見渡します。ここは確かに僕の部屋であるはずなのです。乱雑に本が散らかっているはずの畳の床にはヘナイン・ストーリーズへ熊の場所へ速読古文单語へ存在の耐えられない軽さへ化学一・二重要問題集へオルファクトグラムへ世界の終わりへ山月記・李陵へオリジナル数学二へコズミックへ大学受験のための小説講義へ海の上の少女へ首鳴り姫へといった書名や著者名その他もろもろが本の表紙からそのまま切り取ってきたみたいにして散らばっているし、視線を上げれば数字が並んでいてこれは壁に貼つたカレンダー。ここは確かに僕の部屋なのです。しか

し、床も壁も窓も扉も家具も天井も全てが虚無に塗りつぶされている、とも言えます。

どうやら僕は目が見えなくなつてしまつたらしい。いや、目が見えないのとは少し違います。物体を見るることはできないけどそこに書かれた文字を見ることはできるのです。これはどういうことなのか？瞳が文字以外を受け入れていないのか脳みそが理解していないのか。まぶたは開いています。閉じてみると普通に闇が訪れてくれて少し安堵できました。

目を開く。虚無が広がる。これは夢じやない。現実です。病院に行こう。やはり眼科にいくべきだろうな。とにかくこの普通じやない状況をなんとかしないと。僕は手探りで着替え始めました。服もどれがどれだかさっぱりわからないですが、プリントされている文字やブランド名なんかを手がかりにしてなんとか身支度を整えます。顔を水で洗い、適当に髪を整えます。鏡を見ても反転した文字が宙に浮いていることだけしか判りませんが、別に僕のことなど誰も注意を向けはしないのです。適当でいい。僕は財布に現金と保険証を突っ込み、家の鍵を探し出し、外に出ました。

通りに出ます。相変わらず何も見えませんが、電信柱にある広告の文字などは見えるので、道が判らなくなることはありません。近所の眼科に徒歩で行つてみましよう。歩いて行くには少し遠い距離だけど自転車で行くのは危なすぎます。

暖かく適度に乾いた良い天気。きっと青空だ。空を見上げても何も判らなくなつてしまつたのは少し寂しい気がします。道路の右側を塀を触りながら歩きます。この家人はどうか旧財閥の流れをくむ大手企業の社長らしく、広大な敷地を持つていて、まつすぐ塀が伸びているので助かります。幸い車は通りませんでした。電信柱の床屋さんの広告を目印に角を右

へ。

やはり堀が伸びていますが、僕はその存在をこの目で確かめることができました。それは壁一面に文字が隙間なく並んでいたからです。奥へ奥へと伸びていく白いチヨークで書かれた文字の羅列。達筆とは言えないが、整つていて几帳面な字です。こりやいいや。僕は文字を目印に歩き出しました。

僕が君に出会ったのはこの街だった。街の中心で君は首を吊っていた。君は目を閉じていた。目を閉じていた。目を閉じていた。僕が近づくと君は揺れた。僕が揺らしたんじゃない。君を吊るしているのは大きな檜の木だ。檜の木は太く、大きかった。生命の象徴、ではない。それはただの檜の木だ。檜の木は太く、大きかった。風が吹いても全く揺れなく大きかった。僕が手を伸ばしてやつと届くくらいのところの枝が君をぶら下げている。枝は硬く、繩は細い。君は揺れている。木は揺るがない。風は吹いていない。僕が君を揺らしている。君は揺れていっている。僕が君の腰の辺りを持っている。両手で君の腰を持っている。君の腰の骨を持つていて。君の肉は薄くて骨が飛び出る。腰骨。骨。骨。君は黒い一枚の布をまとっている。布は薄くて骨が飛び出る。僕は君の骨を持っている。君が揺れている。僕も揺れる。君は目を閉じている。少しすつ大きく揺れる。僕は接している。君に合わせて僕は揺れている。いや、君が僕を揺らす。僕は揺れている。君は目を開く。どうして僕は揺れているんだ？君の声はつぶれてかされている。どうして君は揺れているんだ？君が揺らしたからだ。どう

うして僕は揺らしたんだ？いや僕は揺らしていい。風が揺らしたんだ。いや僕が揺らした。何故僕は揺れるんだ？苦しい。僕は落ちる。君は刃物を持っている。緋色の刃物を持っている。君は繩を切った。僕は礼を言うべきか？ありがとう。君が言う。何故ありがとうと言った？君が僕を助けてくれたから。繩を切ったから。僕は君を助けたの？助けていない。そのまま君は揺れればいい。嫌だ。僕はいきたい。そう。ねえ寒い。君は

そして今まさに新しい文字へ服の旁が書かれようとしていました。僕はそこに手を伸ばします。白いチヨークの軽くて冷たい感触と、骨ばつて熱を帯びた指の感触。はつと息を呑みこむ音。戸惑うような視線が僕に向けられたような気がします。よつぼど熱中して書いていたのでしょうか、僕が近づいてくるのに気がつかなかつたみたいです。

「こんなにちは」以前の僕なら見ず知らずの人に声をかけることなんて絶対にないですが。「何を書いているの？」

誰？

という言葉が新しく生まれました。目の前の存在が堀に書いたのです。

「近所に住んでる者です。こんな風な落書き、初めて見たから気になっちゃって」

落書きじゃない

「あ、ごめん。いわゆる路上アートってやつかな？」

これは小説

いいよ

「小説！やつぱりこれは小説なんだ。美しい小説ですね。そしてあなたが小説をここに書いてくれたおかげで、僕はさよわずに済んだってわけだ」

こっちは

意味が判らない

平らな足音を響かせて、前方へすたすた歩いているようですが。僕はどうしようもないのじっと待っていると、く吐くと、空中に静止する文字の方へ歩みを進めます。

こっちは

道路の反対にわたる

ここ左にまがる

こっちは

「実は、僕は目が見えなくなつてしまつて。この道も、塀も、あなたの姿も判らない」なんで通りすがりの人にいきなりこんな話をしているのでしょうか。やはり、いきなりこんな状況に放り込まれて混乱しているのでしょうか。「でもね、何でだか判らないけれど、文字だけは見ることができて。ここではあなたが書いている文章だけ、その存在を認識できる。あなたが小説を書いていなかつたら、僕は何も見えず途方に暮れていたでしょう」

しばらく間をおいてから文字が書かれました。

信じられない

こっちは

車に気をつけて

犬の糞に注意

こっちは

月並みな反応。  
「信じてもらえないか……まあ仕方ないか。それであなたにお願いがあるのですが。近くに鈴木眼科というお医者さんがあるの知つてますか？」  
新しい言葉は生まれない。  
「そこまで案内してもらえませんか？」  
しばらくして、

道路の反対にわたる

こっち

右にまがる

こっち

着いた。

「鈴木眼科」という看板。無事にたどり着けたようです。

ここが入り口

「ありがとうございます。本当に助かっただ

がちやがちやという音。嫌な予感。いきなり、暖かく湿った手が僕の手をとると、プラスチックの棒を握らせました。押し

たり引いたりしても動かない。

あ、今日は日曜日か。

「ごめんなさい。今日、おやすみでした」

帰るの？

かまわない

ばしますと、暖かいものを掴みました。少しだけ湿つていて、手に吸い付く感じがある。生き物の肌です。こりつと硬いものを伸縮する薄いものが包んでいる。それは人間の肩の骨。僕の手のひらがすっかり覆つてしまえるくらいの小さくて華奢な肩。そうか。僕を案内してくれたのは人間だつたのだ。そりや当然だ。人間以外の存在がどうして人間の言葉を書ける？それとも僕は何か精霊とか妖怪とかそういうファンタジーな妄想を自分の脳が生み出していると思つていたのでしょうか。

もちろんここはファイクションではない。僕は文字しか見えませんが、現実の世界です。

僕ははつとして手を離しました。その人の肩はすっかりこわばっています。

「並んで歩きませんか？あ、その、あなたがよろしければつてことですけど。あなたの着てている服の端っこをちょっと持たせていただければ」

長い長い沈黙の後、

いいよ

「ありがとうございます。申し訳ないけど、もとの場所まで案内してくれますか？」

「はい。申し訳ないけど、もとの場所まで案内してくれますか？」

いいよ

僕の手が小さな手に導かれ、僕は薄い布地をつまみました。さつき触つたのが肩だつたことを考えると、この人は肩を出した夏っぽい格好をしているのではないでしようか。今は初夏ですし、奇異な服装ではないです。

歩き出しました。僕も足を動かし始めます。ゆっくりと歩みを進めていく。何か、話さなくては。

「あ、あの。あなたのお名前はなんとおっしゃるのですか？」

という言葉が眼下のたぶんアスファルトの地面に現れました。「ちょっと待つて」と言いながら、僕はその方向に腕を伸

まず

なんでもいいよ

その人は立ち止まり、壁に文字を書きます。

その変な話し方をやめて

「変？」

気持ち悪い

普通に話せばいい

私とあなたは対等

「あ、そう……。自分では判らないけど変なんですかね。判つた。普通に話そう。……こんな感じでいい？」

いい

再び歩き始めた。

「君の名前、教えてくれる？」

好きに呼べばいい

「好きについて……。なんでもいいの？でも急に言われてもな……」

…

自動車の排気音が後ろから聞こえてきて、僕らを追い抜いていきます。お尻のナンバープレートと「Prius」という車名と「Dog in the Car」という文字が遠く離れていきます。

「ちょっと時間ちょうどい。素敵なの考えるから」

はや  
くしつも  
んし  
て

「え？質問？……えつと……」

「なんでもいいってことはないでしょ。名前は大事だよ」  
「文字を書くたびに立ち止まるからなかなか進みません。なんとなく声をかけるのがはばかられて、僕らはただ歩いていきます。道を渡つたあたりから、僕が掴んでいる服が震えているのに気がつきました。気づいた時には、それは気のせいといえないくらい大きくなつていて、歩きながら、チヨークを塀にこする音がして

「あ、じゃあ、なんで、あなたはしやべらないの？」歩みが止まつた。

七

があつて、角を曲がると、

し し し し し し し し し し

突然、へし丶という文字を書きながら走り始めた。とつさのことで手を離してしまった僕はただ立ち止まってへし丶の量産を見るだけ。急いで書いているから本当はへし丶ではないのかもしれない。急いで書くためにひらがなのへし丶を書いているのかもしれない。どちらにせよこのまま行かせてはまずい。少し怖いが後を追つて僕も駆ける。文字の残された塀からなるべくぴつたりくつづいて。指が塀にこすれて痛くなる。やがて

僕は増え続ける「僕は」という文字を言葉を見失つたまま見続けました。文字は大きく乱れ、ほとんど判別不可能。わけが判らない。この人は何をやつてているのだ？僕は何かいけないことを言つたのか？

しばらく経つて、やつと文字を書くことをやめたようです。  
荒い息遣い。僕は近づいて、  
「大丈夫？」

君はいい。嫌だ。僕はいたい。そう。ねえ寒い。  
僕は君を助けたの？助けていない。そのまま君は揺  
れてる。  
「君が僕を助けてくれたから。縄を切った  
から。」

「是非訊いてみたいな」

説文の

「よかつたら僕の家に来ない？あなたの話を訊きたい」

という最初の小説の屏にたどり着きました。文字の上にへし

僕が君に出会ったのはこの街だった。街の中心で君

が重なつて続いています。早歩きで追いかけていくと

どこ？ 家はどこ？

「こっち」

ここまで来れば楽に自分の家の前にたどり着けます。僕は鍵を取り出して開錠すると、

「どうぞ」

おじやまします、という声は聞こえませんが、普通に靴を脱いで入つてくれたようです。家の壁に文字を書かれるのは少し問題ですが、大丈夫でしょうか。

「適当に座つてて」

小さな家なので、目が見えなくても部屋の構造はだいたい判ります。居間兼食堂の椅子に導くと、僕は台所へ。お湯を沸かすのは危険そうなので冷蔵庫からペットボトル入りのお茶を取り出します。冷蔵庫の中は商品名や成分表示の文字なんかでますます雑多。手探りで食器棚からグラスを選び、居間に戻ると机には早くも文字が書かれています。

雨の音が聞こえる。雨。雨。血を洗い流す雨。雨が降つていい。君は雨が好きって言つた。雨に打たれるのが好きって言つた。雨、雨、雨、君が好きな雨。はきたない。君の好きな雨。雨。細長い雨。せかいをぬらす雨。

まあ木の机にチョークで書いてるのだから、拭けば消えるでしょう。僕はコップをまだ文字の侵食がない場所に置いて、自分には注ぐことができないことに気がつきました。

「冷たいお茶でいいよね？で悪いけど注いでくれない？僕がやると溢れちゃうからさ」

きな雨。雨。細長い雨。せかいをぬらす雨。雨の音  
が聞こえる。僕は雨を好きに

いいよ

水の流れる音が二つ聞こえます。

いいよ

どうぞ

「ありがとうございます」

しかし、いつまでも机に文字を書かれるのはよくないでしょう。棚からキャンバスノートと少し迷つて黒ボールペンを出し、

「筆談でもかまわないんだけどさ、机に書かれるのは勘弁して欲しい。こつちに書いてくれない？」  
ノートを広げ、ボールペンのキャップを外すと汗で湿つた手が奪いました。

かまわない

たぶんノートに書かれた文章。

「君は小説を書いてるんだよね」

そう。私は小説家

「なんで、外の壁に書いていたの？いまどき手書きっていうの

も珍しいけど、路上に書くというのも珍しいよね」

書かなければならぬから

「堀に？」

違う。小説が、私を書かせる

「小説が、君を？ あ、じやあ書く場所というよりも書くタイミングが重要ということだね？」

近い。私は常に小説を書かなければならぬ

「常に？ そりや大変だ。休む暇もなく、ところかまわず小説を書かなくちゃいけないなんてね」

大変ではない。小説が私を世界にするから

「うーん。難しいこと言うね」

水のゆれる音。グラスと木がぶつかるくぐもつた音。僕は喉の渴きを覚え、手探りでグラスを探し、見つけるがそれが僕のものかは判りません。

「これ、僕のお茶？」

そう

僕はお茶を飲みます。慎重に、こぼれないように。

「ああ、それじや、あなた、好きな作家とかいる？」

いない。私は小説を読まない

「へええ。そりや残念。本を読まない小説家って存在するんですね。僕は好きだよ読むの。書くのは無理だけど」

どんなのを読むの？

「うーん。そうだな。言つても判らないと思うし。じやあちよつと僕の部屋においでよ」

僕は立ち上がりますと、壁に手をつきながら歩き出しました。後ろを見ると、どうやらちゃんとノートを持つてくれているようです。

僕の家は平屋で、僕の部屋へは廊下を挟んですぐに入れます。狭い中に本棚と箪笥と机と椅子を無理やり詰め込んだ僕の部屋。

「散らかってごめん。椅子に座つて」

ベッドに座つた僕は椅子の軋む音がする方を向きました。

「あ、そうだ。あなたの呼び名なんだけど、ハシバミって読んでいい？」

ボールペンが紙を引っかく音が聞こえ、やがて虚空に文字が現れます。

ハシバミ？

「ヘーゼルナッツのこと。西洋では、ハシバミの枝は地下水とかを探すのに使われたんだ。ほら、さつきあなたは僕を導いてくれたわけだし。いいよね？」

かまわない。私は、ハシバミ

「ありがとう。じゃあこれからはあなたのことをハシバミと呼びます。いやね、この部屋に入つた時に思いついたんだけどさ、ハシバミには元ネタがあつて」

僕は立ち上がりと本棚に向かい、へこそあどの森の物語はじまりの樹の神話～という本を取り出すとノートの文字の方に差し出しました。ハシバミは受け取りました。

「これにハシバミって女の子が出てくるんだ。僕は岡田淳さんの本が大好きでね、児童書なんだけどさ、この本も何度も何度も読んだよ」

文章は読めるが、岡田淳の挿絵を見ることはもうできないのが残念です。ハシバミは本を開くとばらばらめくり始めました。美しい木の実の香りがする文章が現れては消えていきます。

「あ、これはシリーズの六巻目だから、たぶん一巻から読んだ方が面白いと思うよ」

ハシバミは本を閉じると、ノートにペンを走らせました。

今度、読んでみる

「うん。読んでみて」

ハシバミは本を机に置いたようです。

「ねえハシバミ。なんでハシバミはあの家の壆に小説を書いてたの？誰さんつていつたかな……忘れたけど、あの広い家の壆に」

しばらくして、

それは、平らで広かつたから

そういう答えを聞きたかつたんじゃない。  
「なるほど。ハシバミはこの辺に住んでる人なの？」

違う。私は遠い場所からここに来た

「ふうん。遠い場所ね……」

確かに、あのように壆に書かれた文章は初めて見ましたからハシバミの書くことも正しいのかも判りません。もつとも僕はあまり出歩かないたちですが。

だから、いざれは帰らなければならぬ

「帰っちゃうのか……そりやそうだよね」

ノートの文字が消える。ページをめくつたようだ。

私は、世界をつなぎとめるために、小説を書く

「世界、ね。それは僕たちが生きているこの世界と同じもの？」

違う。あなたのいる世界とは別のもの

「そつか」

よく判らない話になつてきました。壁の高い位置を見ると、十二個の数字が環形に並んでいて、ああ、アナログ時計では時間が判らないのだ、うちにデジタル時計なんてあつたかな？

「ねえハシバミ。今何時だか判る？」

判らない

「ちよつと上にある時計見て」

椅子を引きずる音がします。

ノートに書かれた四つの数字を見て、

「あ、もうこんな時間か。そろそろ夕飯の支度しなくちゃいけないな。どうする？ハシバミは食べてく？」

い た だ き ま す

「じゃあちよつと待つてて。まあ簡単なものしか作れないけどさ。なんか食べれないものとかある？」

な い

僕は部屋を出て台所に移りました。さて、何をどうやって作るか。レトルト系ならなんとかなりそうですが、お湯を沸かすのは難しそうです。ご飯は確かに二人分くらい残つてました。食器棚の足元を探ると、レトルトのカレーがいくつか。これら、注意深くやればこぼさず作ることができそうです。しかし、こんな簡略な食事でいいのでしょうか。もしこの状態がずっと続くのなら、いつまでもレトルトというわけにはいかない。こうなると、いつたい盲の人はどうやつて料理するのだろう。何か特別な料理器具もあるのかな。そこまでは用意できなくとも、器具や食器にその名前のメモをつけるくらいはするといいかもしれない。それでも食材を切つたり火を使つたりは難しそうだけど。あ、そうかハシバミに手伝つてもらえばいいのだ。

僕は手探りで自分の部屋に戻りました。机には、

とあります。

「ハシバミ。悪いけどやつぱりこの眼じや夕飯作りはできそうにない。手伝つてくれない？」

しばらく待ちますが、期待していたへいいよ／＼も、立ち上がる気配もありません。

「ハシバミ？」

右手を突き出し、アザミの茂みの隙間に差し入れるように伸ばします、が、手ごたえなし。

「ハシバミ？」

ハシバミがない。

家中を名前を呼びつつぐるぐる回りますが見つかりません。ハシバミはどこへ消えたのか。もしかして、最初に出会つたときからハシバミは僕の妄想？そんなばかな。机にもノートにも、文字が、ハシバミの文章が確かに残されている。これがハシバミの存在証明となるはず。いや、文章そのものがハシバミであるという可能性は？いや、外で僕は間違いなくハシバミに触れた。あれは生き物の肌だつた。僕はハシバミの汗ばんだ温度を思い出すことができる。急に喉の渴きを覚えた僕は、居間の机の上のコップを手探りで探すと、それが僕のかハシバミのかは判りませんが、一息に飲み干しました。

しかしまあ今更どうすることもできません。ハシバミのことはひとまず置いておいて、僕自身のことについて考えたいと思います。この状況で果たして暮らしていくことができるのか。食事は？排泄は？風呂は？助けもなしに、いきなり眼の見えな

判らないよ、君は笑う。僕は笑わない。僕の笑いは君をあざむく。僕の笑いは、あざむかない。君の笑いではあざむけないよ。君の虚勢。僕の迷い。僕は見える。君に

ご飯はまだなの？ おなか空いた

い人のような生活ができるのでしょうか？ただ文字が見えるということは救いです。やはり、メモをいたるところに貼り付けているのが最善か？いつのまにか室内的文字が見えづらくなつていて、これはだいぶ暗くなつてきたため、僕は部屋の灯りのスイッチを入れます。そこで玄関のドアが開く重い音がします。

泥棒？鍵、閉めてなかつたつけ？僕は身構えて玄関の方を向くと、居間のドアが開いて、文字の固まりが現れました。折れ曲がつたり途中が隠れたりして一つ一つの判別はつきませんが、いくつかには見覚えがあります。前、あんな感じのロゴが入つた服を着た人が周りにいたような気がする。軽い音がして、山が床の上に築かれました。

「ハシバミ？」

僕は近づきますと、机に白チョークの文字が生まれます。

ご飯、できた？

「ハシバミ、なの？どこへいつてたの？」

服を持ってきた

「僕が言う通りにしてくれれば大丈夫だから。やつてみない？」

やつてみる

私は料理をしたことがない

「じゃあ台所に行こう。……あ、その前に僕の部屋に行つてノートとペン、持つてきてね」

足音が聞こえ、ハシバミは僕の部屋の方へ行つたようです。台所で待つていると、やがて、

何をしたらいい？

どうやらハシバミは両手いっぱいに服を抱えて戻つてきたようです。もしかして、いやもしかしなくてもハシバミはうちに居座るつもりなのでしょう。

「帰らなくて、いいの？」

しばらくここにいることにする

という文字が虚空に現れました。多少の乱れはあるものの、やはり丁寧なハシバミの筆跡。

「そうだな……」

冷蔵庫の中身を思い浮かべる。

「じゃあカレーを作つてみようか。基本中の基本だから。失敗することもないはず」

レトルトのカレーなんて悪なのです。まあルーは市販のものを使うにしても、ちゃんと料理をしなくちやいけません。

「そう……」

ハシバミに材料を指示します。ニンジンは無かつたから割愛。集め終わったら、洗わせて、包丁とまな板の場所を教え、

材料を切つてもらいます。ジャガイモを触つてみると、だいぶ形が不ぞろいのようですが、ちゃんと切れているようです。いつもだつたらフライパンで作つてしまふのですが、今日は鍋で。材料を炒めるように指示します。肉は、冷凍の鳥そぼろがあつたのでそれを投入。最後に水を入れさせます。ハシバミの言葉を信じるのなら、全部上手くいっているはず。

「しばらく煮込んだらルーを入れるよ」

判つてゐるよ それくらい

「あ、そう。そりや失礼」

普段よりだいぶ時間かかつてますが、二人羽折のだから仕方ありません。これから慣れていくようにしないと。ああ、明日は早起きですね。

ハシバミに訊くと、煮込まれてゐるようなのでルーを投入。きちんと溶けているか心配ですが、時間を見て、最後にチヨコレートを入れます。

どうしてチヨコを入れるの？

ふつう

「これが我が家の方なんだよね。隠し味というやつ」

これ、あまり甘くない

「あ、つまみ食いしたね？ 別にいいけどさ」

うちにあつたチヨコレートは、森永ビターチヨコレートでした。

「僕はこのくらいの甘さがちょうどいいけどな」

チヨコは、甘ければ甘いだけいい

「ふうん。そんなもんかね」

次は甘いのにして

次、とはどういうことでしようか？

「いいよ。好きなのを買えばいい」

実際、うちではカレーに入れるくらいしか用途が無いのです。あまりお菓子は食べないという習慣なので。

カレーが完成しました。器によそつて、テーブルに運びます。ハシバミのチヨークでものすごく汚れているので、台拭きを水で濡らして拭きます。

「いただきます」

味は……普通でした。やつぱりカレー作りは火加減とかに気をつけければ失敗することは無いのです。

「おいしい？ ハシバミ」

「そう？ ちゃんとカレーの味になつてゐるよ。初めて作つたにしては、上出来上出来」

本当はサラダなんかも用意したいところですが、そういう副菜が無くても一食分になるいうのもカレーの魅力ですね。

食べ終わつたら、洗い物です。食器を水ですすいで食洗機にパズルのように入れるように指示します。僕は炊飯器の釜を手探りで洗います。二人でやるとこんな風に分担することができ

るのです。風呂は既に洗つてあるので湯を張るスイッチを点けます。精米し、米を二合水で洗います。釜の側面書かれた数字

は見えるので自分で洗おうとしましたが、どうにも上手くいかないのでハシバミにお願いしました。ポイントは熊の手ですよ。水が多いのではと心配ですが、炊飯器に釜を入れてもらひ、へ予約のボタンを押します。

ひとごこちついて、居間に戻ると、ハシバミは早速文章を書き出しました。黒い文字が浮き出ます。

暑い、のどが渴いた。君が言う。眼球ならあるけど、僕は言う。僕はポケットの缶から蝶の眼球を取り出すと、一つ渡す。君は口に含む。甘くておいしい。転がして、君の眼球も甘いのかな。僕の眼

ハシバミが文字を置いていくのを眺めているのは、なんだか心が休まるのです。ハシバミはすごく丁寧に字を書く。整つているのですが、上手というよりは丁寧なのです。一画を引くのに時間をかけ、バランスを考えて書いている。特に僕は字が汚いから、こういう風に文字を書ける人は素直に尊敬できます。まあその書いてる内容はわけの判らぬものばかりなのですが……。へ蝶の眼球？ハシバミは自分を小説家と言いましたが、はたしてハシバミが書く文章を小説と言つていいのでしょうか。

一つ渡す。君は口に含む。甘くておいしい。転がして、君の眼球も甘いのかな。僕の眼球は甘いのかな。僕の舌が君のめじりを刺す。僕は舌を水平に動かす。君の舌が僕の目頭をえぐる。どう？甘いけど、血の味がする。舌を出しているのに、君は話せる。不思議だね。不思議だね。僕の舌はとがついて痛い。猫みたいにとがっている。この街にも、

書くタイミングによつて話の状況は全然違う気がするが、ハシバミの中ではつながつてているのか？ハシバミの頭の中には大河のような物語があつて、ハシバミはそれを切り取つている？共通するのはへ君へとへ僕へが出てくること。主語がころころ変わるのは文章を書き慣れていないから？へ君へ僕は同一の人間？へ君へ僕は誰？

アラームが、お風呂が沸いたことをお知らせします。

「お風呂沸いたみたいだけど、入る？やつぱこういう時はお客様から入つてもらうもんじやない？」

ど、

だんだん力をつけてきた作家は、自著の中でへ小説へとへ物語の違いについて語ることが多いように思います。小説家それぞれに、いや、自分のことを物語作家と称する人もいそですが、このことに関しては持論があるのではないでしようか。まあこれといった論拠も無いんですけど。ただ思いついたことを垂れ流していると言うか……。即興詩？詩ではないな。ただの駄文？意味なんて無い？それを言つたらおしまいか。僕には汲み取れないハシバミの意図がこの文章にはあるはず。いややつぱり無いのかな。

ね。僕の舌はとがつていて痛い。猫みたいにとがつて いる。この街にも、猫がいるの？ いるよ。僕の友達だった。いたよ。猫はいた。

先に入つていいいなら、入る

「タオルとか棚に入つているのを適当に使つていいからね」

ハシバミが出て行く音。扉を閉める音。棚を閉める硬い音。服を脱いでいると思われる音。風呂の戸のピストルみたいな音。浴槽の蓋を外す音。お湯が揺れる音。そういえば、風呂の中はどうやつて文章を書くのだろうか。書かなくて大丈夫なのだろうか。病院から帰つてきた時みたいにハシバミは不安定になるのではないだろうか。ハシバミは常に文字を書いているのだ。僕とのやりとりを含めると、ほとんど休むことなく書いていることになる。

シャワーの音。ハシバミは身体を洗つているようだ。身体、ハシバミの手は汗ばんでいた。それは実に生き物という感じがして、よかつた。他の人の汗なんて全然感じたくないが、ハシバミの存在を、それが書く文字でしか視認できない僕にはその感覚は救いなのだ。僕はハシバミの顔も、体つきも、髪型も、表情も、癖も、仕草も判らない。でもそういうのが判らないからこそ上手くいく関係もあるんじやなかろうか。ハシバミがいつまで居座るつもりか判らないが、なるべく友好な関係でいたい。

あ、体つきは多少判る。僕はハシバミの肩に触れた。ハシバミの肩は僕の手のひらで包めるくらい小さく、華奢な印象だつたと思う。その高さは僕の臍よりも少し上方といつたところだろうか。すると、そこからハシバミの背の高さを想像でき

る。ハシバミは、瘦せていて、背は僕の胸の高さくらい。これ以上の描写は今のところ難しい。

ハシバミは再び湯船に浸かっているみたいだ。もしかしたら油性ペンなんか持ち込んでいてそれで壁に書いてるかも知れない。それは少々いただけない。様子を見に行つた方がいいだろうか。どうせ、僕にはハシバミの姿は見えないのだし。いや、もうすぐ上がつてくるだろうしそれまで待とう。

お湯が大きく揺れる音。浴槽の蓋を閉める列車みたいな音。風呂の戸の音。布の触れ合う音。そういえば、ハシバミはちゃんとこの衣類の山から下着や寝巻きを持つて行つただろうか。うちにはバスローブなんて洒落たものは無い。ドライヤーの音。僕が使うよりずっと丁寧に髪を乾かしている。

全部終わつて、足音が近づいてきます。やがてほかほかした存在が居間に入つてきました。体温の高いハシバミはますます温まつてはいるはずです。ハシバミがどんな格好をしているのかは判りません。全裸なのか、下着姿なのか、パジャマを着ているのか。衣服の山の文字の固まりが崩れます。寝巻きを探しているようです。やがて「Don't mind if you forget me.」という飾り文字が立ち上がりました。ハシバミは服を着たようです。続いて、ハシバミの文字がノートに生まれます。

あなたの部屋にいる

「大丈夫だった？ ハシバミ」

何が？

「お風呂の中じや、文字を書けないでしょ」

「鏡？ああ湯気で曇つた鏡に書いたわけね」

あなたの部屋にいいよね？

「いいよ。僕も風呂に入つてくる」

さて、僕は風呂に入れるでしようか。

脱衣場に入ると布を踏みつけました。かがみこむと床には衣類が脱ぎ散らかっているようです。ハシバミが脱ぎ捨てたものです。その山を脇にまとめ、僕も服を脱ぎます。靴下を脱ぐ時によろけはしたものの、なんとか脱ぐことができました。

風呂場の中は濡れていて、熱気と湿り気を顔に感じます。正面にはうつすら文字が見えますが、消えかかっていてよく判りません。

シャワーを探し、水を出します。やがてお湯になつたことを確認すると、頭にかけます。シャンプーのボトルなどに書かれた文字。初めてまじまじと見ました。髪を洗い、髪を剃り、顔を洗い、身体を洗う。やつてみると、意外と目が見えなくてできました。泡が残らないように少しだけ時間をかけてお湯を流します。ふと顔を上げると、湯気によつて鏡に書かれた文字が浮き出ています。

君は時計になりたい。どんな時計？ちゃんと一周する時計。切り取るのでは駄目なんだね。でも時計は二本必要だ。長いのと短いのと。短針あれば十分だよ。そんなことは。

湯船の蓋を外します。そこには漠々と虚無が広がつていて風呂が広くなつたと錯覚できそうです。手を突つ込んで湯温を確かめます。いつもだつたら浮いてる湯垢や髪の毛を取るのですが、まあ今回は我慢します。慎重に腰を落ち着けると、やはりお風呂は気持ちいいのです。今日一日の疲れが抜けていきます。なんだか脚や腕が筋肉痛になつていていたのですが、それも樂になつてきます。視覚の欠如。そしてハシバミとの出会い。今日はいろいろありました。お湯の中で指を持ち上げると、何かが絡みついてきました。つまんで確かめると、それはどうやら長い髪の毛です。僕の髪は短いからこれはハシバミの髪なのでしょう。湯船の外に捨てて、肩まで沈み込むと、窓の外から声が聞こえきました。複数の人間の声です。大人の声です。必死な印象の声です。語尾を伸ばしていて、何かに呼びかけているように聞こえます。なんと言つてはいるかは判りません。逆に普段聞こえてくる犬の鳴き声は聞こえません。隣家の犬の声は特徴的で、いつもむせび泣く赤ん坊のように聞こえてくるのです。

僕は風呂を出ました。タオルを探し、身体を手早く拭きます。下着とTシャツとジャージのズボンを探します。始めは下着の前後ろが逆になりましたが、身につけることができました。ドライヤーで髪の水分を払い、ブラシをかけて適当に整えます。歯ブラシをなんとか見つけ、商品名の書かれたチューブから練り歯磨きを搾り出し、最初は洗面台に落としましたが二度目にブラシの上に乗せることに成功し、口に突つ込むと汚れた指先を流水で洗い、歯を磨きながら居間に戻ります。椅子に座つて、当たり前ですが、目が見えなくても歯を磨くことはできるのです。鼻の奥にオレンジミントの感触があります。視力を無くして、他の感覚が鋭くなつたとか、そういうことは無いみたい。いつもより意識して歯を磨くと、なんだかとろとろと

眠気が眼の下辺りに渦巻き始めました。歯を磨き終え、洗面所に行き、ゆっくり口内のものを吐き出して口をゆすぎ、居間に戻ります。もう寝ようかなと思い、ああハシバミに寝床を用意してやらなければいかんのだ。どこで寝るんだろう？僕の部屋というわけにはいかない。じやあこの部屋に寝てもらうか。布団は探せばありそだが、押入れの臭いが染み付いていそうだ。我慢してもらうしか無いかな。そういうえば、ハシバミは今どうしているだろう？

自室に向かいました。ハシバミの文章が床に落ちています。ゆつくり足を踏み出ると、柔らかくて多少の厚みがある布地を踏みました。これは掛け布団？既に布団が敷かれている？もう一步踏み込むと、硬くて熱いものを踏み、空気が抜ける音がしました。僕は急いで足を持ち上げて、

「ハシバミ？ごめん気がつかなかつた。大丈夫？」

文章に動きはありません。

「布団敷いちやつたんだ。それでさ、今日ハシバミが寝る場所なんだけど、これから居間に布団敷くからそこでいい？ずっとしまいっぱなしだから、ちょっと臭いかもしねないけど」

見下ろすと、新しい文章が書かれました。

かまわない。私はここで寝る

何がかまわないのでしょう。

「僕の部屋で？僕の布団で？まあハシバミが気にしないならいいけどさ」

他人に自分の布団を使われるくらいは気にしません。

「じやあ僕が居間で寝るかな」

あなたもここで寝ればいい

「一緒に？いやそれはまずいよ。狭い部屋だし」

布団は二枚敷ける

「そういう問題じゃなくて。……あああとにかくハシバミはここで寝ていいから」

そう

僕は押入れを開けました。もちろんその先に広がるのも虚無ばかりなのですが。しかし、こんなところに布団なんか無かつたてあつたかな？そもそもうちには来客用布団なんか無かつた気がする。どちらにせよ、下手にこの中をさまよつたら取り返しのつかないことになりそうです。僕は押入れを閉めました。

ハシバミが寝転がっているだろう場所を避けて廊下に出て、家の中を探すことになります。前には居間への扉。右手には風呂とトイレ。左手には玄関。玄関の方にも居間に入る扉があります。僕は左を向いて歩みを始めました。左手を伸ばして壁を撫でながら。湿っぽい壁紙。つるりとした木の感触。木の感触？これは、扉？何故ここに扉がある？部屋？自室以外の部屋？うちには部屋は僕の部屋しか無かつたはずじや。右手が冷たい金属を掴む。この家には誰かいいるのか？これは誰の部屋？知らない。レバーを傾ける。扉を引く。このにおいは

体中が痛い。痛みで目を覚まして、自分は廊下で寝ているのでした。冷たい板張りの床に身震いして起き上がると、僕の身体にごわごわとした布がかけられています。これは……ダッフルコート？厚みのある布。てらてらとした裏地。そしてつるつ

ると硬い小さな肋骨。ダッフルコートなんて持つてましたっけ？僕はそれを抱え上げると、居間へ行きました。デジタル時計の数字を確認すると、まだ早い時間です。しかし寝なおすほどの時間はありません。ああそもそも寝る場所が無いんです。僕の部屋はハシバミが使っているし、他に布団は見つからぬし。かといって、わざわざ廊下で寝ることも無いよう思えます。なんだか血液の代わりに水銀が巡っている感じです。いや、水銀みたいな綺麗で冷涼なものじゃなくて……たとえばゴム状硫黄とか？どうでもいいや。このコートはハシバミの服でしょう。廊下で寝転がっている僕にかけてくれたのでしよう。ハシバミにそんないたわりがあつたとは。

コートを適当に畳んで隅に置きます。横にはハシバミが持つてきた服の山がそのままになつていて、散らばつた文字の様子から判ります。『Hazelhuts Company』というブランドのロゴが見えます。こんなにたくさん服をしまうスペースなんてうちにあるのでしようか。壁に手をつきながらキッキンへ。さて、弁当を作らなければなりません。どうやつて作りまして、オール冷食？ハシバミが起きてきたら、果物くらいは切つてもらいましょか。冷凍庫を開けると実に極彩色が広がっています。冷凍食品らのパッケージ書かれた文字です。いくつか選んで、頭の中の弁当箱に詰めていきます。次に野菜室を開けますと、今度は文字はまばら。虚無をかき回すように腕を突っ込んで何があるのか捜します。お、この薄いビニールに包まれた六個の果実は枇杷です。僕の一番好きな果物。お弁当に入れると茶色く汚くなつてしまいますが、この眼では気になりません。他には……キウイありますね。入れましょ。いくつか取り出して、洗います。目が見えない分念入りにこるので、普段よりも綺麗に洗えているかもしません。普段はフルーツの他に野菜炒めや卵焼きなんかを作りますが、ハシバミがちゃんと

と作れるか判らないし、そして指示して作るには時間がかかることは昨夜判明しています。手を伸ばすと金属が触れ合う耳障りな音がしました。よくよく確かめるとヤカンです。お茶を入れるのは無理でも、ヤカンに水を入れて火にかけるくらいはできそうです。腕にかかる負荷から水の量を推測して、上手くヤカンの尻が座るコンロの位置を探ります。ヤカンの周りに物が無いことを確認してから火を点けます。うちには三つ口コンロですが、ちゃんとヤカンの位置に火が点いていることが熱で判ります。

さて、鞄の用意でもしましようか。ハシバミにはまだ寝てもらつていて大丈夫ですが。僕はくしゃみを一つしました。思いなしか身体の芯に寒気を感じます。初夏とはいえ、あんな所で寝たのでは風邪を引いて当然です。自室に向かいました。扉を引くと、規則的な寝息が聞こえます。足を忍ばせて室内へ。ハシバミの、たぶん枕元と思われる位置に文章が置かれています。

はひゅるんひゅるんと言う。違う。言ってるんじやない。僕は奏でてるんだ。何を？歌を。君は銀色の箱の前に座つていて。二本の鉄の棒が生えた箱。君は風を操る。僕は歌を奏でる。ひゅるん。ひゅるん。君の歌だよ。突然動きを止める。僕の歌？僕は戸惑う君を笑う。また手を動かす。ひゅるん。聞こえないかな。君は判らないみたい。僕の歌か。じゃあ僕は君の歌を歌うよ。僕は僕の歌に合わせて歌う。歌う。歌う。僕と君を包む歌。僕と君を包む風。音楽。冷たい色。でも君は自分の声が無いことに気がつかない。僕は気がつかない振りをする。君はそのことに気づいてる？君は気づいてる？風はい

が作ってくれるならちやんとしたのになるんだけど

あなたが教えてくれたら、私が作る

ノートをばらばらとしてみると、半分くらい消費されています。これは横畠の大学ノートですが、縦書きに文字が書かれてあります。すごいのは、文字の大きさが揃つていてまるで升目のノートに書いたように均質に並んでいることです。ただ字間行間は詰まつていてそこは読みづらい。僕はハシバミを起こさないよう静かにそれを戻すと、机の脇の鞄に荷物を詰めます。たいていは文字が書かれているので迷うことはありません。部屋の隅に転がつていた「CROWN English Series [II] New Edition」を忘れず鞄に放り込みますと、僕の肩に暖かいものが触れました。振り返りますと、どうやらハシバミが目覚めたようです。

「おはよう。起こしちゃつたね。ハシバミ」

息を大きく吸い込む音が前でします。ハシバミが、あくびをしたのです。

「ハシバミが手伝ってくれるとちゃんと朝ごはんが作れるんだけど、いいかな?」

衣擦れの音がして、ハシバミが離れていきます。僕もノートとボールペンを拾つて後を追います。キッチンで、シンクにノートを広げると、

何を作るの?

「そうだな……。いつもはお弁当作つた残りとかで済ませるんだけど」

お弁当はもう作つたの?

「いいや。でも今回は冷食で済まそうと思つて。あ、ハシバミ

「そう? ジやあお願ひしようかな」

お弁当と朝食ができました。ピーマンとモヤシとウインナーを炒めたのと、卵焼き。卵焼きは出来が心配です。フルーツも切つてもらいます。僕は隙間を埋めるように冷凍食品をセレクトし、レンジで解凍。文字が書かれているものなら扱えるのです。ハシバミがよそつたご飯の量を重さで確かめます。沸かしておいた湯でほうじ茶を淹れます。冷蔵庫から梅干と納豆二パックとヨーグルト二パックを出します。昨日に比べるとずいぶん手際が良くなりました。

テーブルについて、テレビを点けます。あまりテレビは見ませんが、朝食の時だけ時計代わりに点けるのです。ニュースのテロップしか見えませんが、それと音声だけでどんな内容のかはだいたい判ります。へ常用漢字改定案答申へ回転寿司店に車突つ込み十二人怪我、運転手逮捕へ男子やり投げ十一連覇へ

「そういうえば、昨日コートをかけてくれたみたいで。ありがとね」

何故あんなところで寝ていたの?

「なんでだろ? その辺の記憶が曖昧で。布団を探していたのは覚えてるんだけど」

本当は、私の部屋に運ぼうと思つた

「いちおう僕の部屋だからね」

けれど、私の力では無理だった

「重かつた？そりやそうか」

次からは、一緒に寝るのがいい

「だから一緒にまずいって」

私はかまわない

「はあ……。寝床については考える必要がありそうだ」

占いが終わつたあたりで二人とも食べ終わり、流しに食器を漬けるよう指示します。洗面所へ行き、歯ブラシが二本並んでいることに気がつきます。片方にはお尻に「H」と書かれていて、これがハシバミのなのです。

「イニシャル書いたんだね」

歯磨きをします。ハシバミも歯を磨きます。ユニゾンで聞こ

える歯磨きの音。済ませてしまふと、僕は自分の部屋にいつて着替えました。鞄も持ちます。居間に戻ると、ハシバミはやはりノートに何事か書いているようでした。僕はお弁当を収納します。鞄をべたべた触つてきちんとしまわれていることを確認。

「じゃあ、ハシバミ。行つてくるよ」

とてもとても切なさが。僕の声。届かない。君は崩れてしまつた。いや、違う。崩れて

どこへ行くの？

「どこつて……学校だよ。鍵は閉めてつちやうから外に出ないでね。あ、それと洗い物しといてくれると助かる」

学校？

「滝高だよ。滝の原高校。言つてなかつたつけ？」

高校生？

「そういうえば特に訊かれなかつたから言いはぐつちやたかな。僕は高校二年生なんだ。……じゃ、今日は歩きだからそろそろ行かないと。夕方には帰つてくるからね」

僕は玄関に行き、何足か並んでいる靴から「adidas」とロゴの入つたスニーカーを見つけ、履きます。扉を開け、外に出ると鍵を閉めます。これにはだいぶ時間がかかりました。もしかして鍵なんて閉めなくとも大丈夫でしょうか？ハシバミに鍵を預けておいても？昨日会つたばかりの人にいきなり留守を任せていいいもんだろうか。ハシバミは信用できる人？新手の居直り強盗みたいなのだつたりして？まあひとまずそれは置いておきましょ。問題は、どうやつて滝高まで行くか。いつもは自転車ですすいと行つてしまふのですが、こんな状況ですし。幸い学校と家が近く、徒步でも三十分くらいの距離なので、注意深く言つても遅刻することは無いでしよう。僕は昨日のハシバミの文字の壁を目指します。あの眼科は通学路にあるのです。最近は晴天続きで、チヨークの文字は美しく残っています。

へ鈴木眼科へまで来ました。今日は、休診ということは無いでしよう。帰りに寄ろうか？しかし、今の僕が行くべきなのは

眼科というより内科という気がします。身体の骨は冷えているのに頭ばかりが沸き立っている。熱があるみたい。やはり風邪を引いたようです。

さて、ここからはハシバミの導きはありません。記憶を頼りに学校を目指します。ハシバミはいなくても、棒を持つていけばよかつた。盲人のように扱うことはできなくとも、目が不由なのだとアピールはできます。道中、僕を何度も風が追い越していきます。自転車です。たいていはお尻にステッカーが貼ってあって、滝高生のものも少なくありません。それが走り去る方向に僕も行けばよいのです。文字以外見えない世界では、ステッカーの数字も遠く小さく見えなくなるまで確認することができます。

大きな通りに出ました。車のナンバープレートはだいたい同じ位置を流れていますので、それを参考にまっすぐ歩いていけば歩道を外れることはできません。途中二度ほどクラクションを鳴らされましたが、無事に信号まで着きました。まるにえ県のドライバーのマナーの悪さを思うとちょっとした奇跡です。へ歩行者　自転車専用　押ボタン式。学校の予鈴が聞こえます。ボタンを探すと、へお待ちくださいのランプが点灯します。この赤い文字、普段は暗くてほとんど見えないので、今ははつきりその存在が判ります。ランプが消えて、へ歩行者　自転車専用の看板の真下を目指して歩きます。無事に渡りきり、後は校門を目指すだけ。壇に指をつけながら、歩みを進め、注目するのはやはり僕を追い抜く自転車のステッカーの数字。校門の中に入つてからは、ほとんど文字が無く、それを頼りにしないと全く見当違いの場所に行つてしまつ。それでも、なんとかステッカーがいっぱい並んで停止している場所まで来ました。はあ、はあ、と息が上がつています。嫌に冷たい汗もかいています。それでも無事にたどり着いたのです。

ここは駐輪場で、各学年棟への昇降口もここ。さあ、急がないと。頭の中は半分融けた鉛のようで、身体は地球がプレートを動かすよりも億劫です。早く、自分の席に着いて休みたい。下駄箱には出席番号が振られているので迷うことはありません。スクールサンダルに書かれた自分の苗字になんだかほつとします。

いつの間にか、僕は喧騒に包まれています。異星人の言葉を聞いているようです。滝高の、男たちが立てる騒々しさ。滝高は男子校。一クラス約四十人×七クラス。僕のクラスは二階。一階は文系二階は理系。階段を手すりを掴みながら上がつて行き、へ2年4組。僕は自分のクラスの様子を思い描き、自分の席の見当をつけます。教室の中は意外と文字で溢れています。壁に貼られたプリント、机上の教科書類、黒板に書かれた落書き、自分の席を見つけました。

「ここ、僕の席だよね」

おはよう。何当たり前のこと?などと周りの席の人が言っています。

「いや、ちょっとね」

始業のメロディがなります。曲は、滝の原高校応援歌。

僕はテーブルに突つ伏します。身体の具合はますます悪い。このまま一日を過ごせるのか、というのはかなり疑わしいことです。ただでさえ目が見えないのに、その上冷静な判断ができるない。担任教師がやつてきて、ホールームが始まつた、と思つたら終わつていて、最初の授業は古典。ノートを広げるとへ枕草子　二月つごもりごろにの写しと僕の和訳が現れました。ハシバミの字と比べるとどんなに僕の字は汚らしいんだ。いやハシバミと比べなくても僕の字は汚いですが。板書もきちんと見えます。教師の立つている姿は判りませんが。うつらうつらしながら教師の話を聞きます。話が脱線して、僕実は物理

のあの先生と同じ歳なんですよ。どつちも三十路に入りたて。あの先生、娘さんが。そうそう結婚されてるんですよ。立派ですねえ。先生は？僕？僕は実家暮らしかずから。大学の四年間以外うち離れたこと無いですから。笑い声。え？先生もしかして……ですか…………。肩を叩かれて目を覚ますと、黒板の文字も消され、授業は終わってしまいました。大丈夫？顔色悪いよ。

「ああ、ちょっと風邪気味で」

保健室行く？

「いや、大丈夫だから」

実際、保健室で寝ていたい気分です。鼻をする。本格的に風邪のようです。

二時間目は数学。先ほどとはうつて変わつてクラスの連中の態度も鋭敏です。今やつてはいる単元は数列。ベクトルとかじやなくて助かりました。図形は全く見えないので。どうしても書く必要がある場合はへ。＼とかへム＼を書くつもりで書くしかなさそうです。＼の計算を展開。横書きの場合はノートと机の境界が判らなくて文字が右の外にはみ出ることは無いですね。しかし、それにしても熱い。首の辺りが猛烈に火照ります。そしてまた半分睡眠に入つている間に授業は終わりました。

三時間目は体育。体育？こんな身体じやどても無理でしょ。目も見えないし。見学だ。見学つたつて何も見えないでしょ。最近体育ではずつと飛び箱をやつていましたが、今日は体育館が使えないのと外で自由に運動しろとのことです。テニスをやつたり、サッカーをしたり、キヤツチボールしたり、めいめい自分がやりたいことをやつてはいるはずです。僕はその様子をベンチに腰かけぼんやり眺めていました。たいていジャージには文字が書かれているので人間の位置は判ります。しか

し何をやつてはいるかまでは判りません。僕はあくびをすると身体を縮こませました。頭の熱と、身体の冷たさの対流。溢れる鼻水。今まで早退なんてしたことありませんが、これは帰るべきじゃないでしようか。教師のもとへ行こうと腰を上げかけた矢先、目の前の砂場に文字が現れることにきがつきました。

「何？」

何して

この眼のことはまだ誰にも言つていません。だとすれば、

何してるの？

「ハシバミ？」

私は、ハシバミ

「なんでハシバミがここに？来ちゃ駄目じやん」

慌てて周りを見渡します。クラスの連中の存在は判つても、その視線の先までは判りません。自分への注視は判りません。ハシバミは本当にここにいるのでしょうか。

「ハシバミ、どこにいるの？」

僕の両頬を包む生暖かい弾力。ハシバミの両手だ。やつぱり汗ばんでいますが、昨日ほどの体温は感じられません。次にハシバミは右の頬から手を離すと、僕の額にそれを当てました。

熱を発する額にはむしろ心地よい涼しさすら感じます。ハシバミは離れ、再び砂場に文字を書きます。さつきの感触に砂利の不快なそれはありませんでしたから、棒か何かを使って書いているのでしょうか。

ひどい熱 早く帰った方がいい

「やつぱり？僕もそう思つてた。こんな眼じや体育見学もつまらないしね。じゃあ保健室に行つて熱測つてから早退するから、ちよつと待つてて」

「あーここで待つてるのはちよつとまずいかな。目立たない場所にいてくれる？」

僕は立ち上がり、まずは体育教師を探します。授業の初めに整列したとき、彼は「kappa」と胸にロゴが入つたジャージを着ていました。それを探すと、はたしてサッカーフィールドの隅にぽんやり佇んでいる人がいます。あの人が先生であることを願いつつ、近づいて、

「あの、やつぱり具合悪いみたいなんで、保健室行つてもいいですか？」

正解でした。あん？大丈夫か？確かに顔色悪いぞ。行つてきな。

「はい」  
砂場の方に戻ると

いいよ

僕は穴を掘る。穴を掘る。掘る。掘る。君を埋めるための穴、ではない。穴。穴。僕を埋めるために必要なのは。

ハシバミの姿は無いようです。文字の入つた帽子なんかを身につけてもらえると判りやすいかな。僕が元気になつたら一緒に買いに行こう。さて、保健室はどこでしようか。適当に歩き出すと、誰かにぶつかりました。

「わ、ごめんなさい」

滝高指定ジャージを着ている人です。「TAKINOHARA

SINNOR HIGH」と胸の辺りに書かれています。その下には名前を書くスペースがあるのですが、そこには何も書かれていません。おう。それよりお前大丈夫？休んどけよ。

「ああ。今から保健室行く。たぶん早退すると思う」

「そつか。送つていこうか？」

「じゃあお願ひしようかな」

渡りに船という奴でしようか。滝高ジャージの背中には何も書かれていないので、見失わないようになつた。少し前を歩きつつ後ろを向き、彼の歩む方向を見極めるというおかしな歩き方。大丈夫か？ふらふらだぞ。

「ああ。ちよつときついかも」

やがて右腕が硬いガラスに触れ、校舎につきました。後はもう大丈夫？一段高いところがあつて、そこから首を突き出すと左手に「保健室」の看板。

「うん。ありがとね」

お大事に。親切なクラスメイトはそう言うと戻つていきました。僕は靴を脱いで校舎内。保健室のドアは開いていました。

「失礼します」  
先生はいらっしゃるのでしようか？

ううん？どうしたの？奥の方から声がします。

「ちょっと熱っぽくて。風邪引いたみたいなんです」

じゃあそこ座つて。はいこれ。へ88.88へと表示されている小さな棒をつまみます。椅子はどこだ？ビニール張りの長椅子は？壁に貼つてあるポスターから壁までのだいたいの位置を予測し、手をおそるおそる伸ばすと椅子を発見。座り、体温計を脇に挟みます。

「先生、ちょっと聞きたいんですけど」

「視力の病気で、文字以外が見えなくなってしまうという症状のものってありますか？」

「どういうこと？文字は見えるの？」

「普通に目を開けていても、飛び込んでくるのは文字ばかりで、他のものはみんな曖昧な色で押しつぶされてしまうんです」

「ふうん。面白いお話だね。ちょっと聞いたこと無いかな。」

「あ、そうですか」

もしかして、今あんたその病気なの？」

「え？違いますよ。ちょっと思いついただけです」

ふうん。体温計のアラーム。懐から取り出すとへ39.88へ。四

十度近いじゃん！帰つて寝なくちや駄目だよ。むしろなんで学校来たの？」

「いやあ朝から風邪っぽかつたんですけど、大したこと無いかなーって」

いつも何で通つてるの？おうちの人は来れるの？」

「いつもはチャリで。でも今日は具合悪いんで歩いて来ました」

「あ、大丈夫です」ハシバミが迎えに来てくれたから。

僕は立ち上がりと礼を言つた。ちゃんと病院行きなさいよ。学校行く前に熱測つて、高かつたら来ないんだよ。

「はい。気をつけますよ」

僕は入つた道を逆にたどるようにして廊下へ。靴を履いて、もうこのまま帰つちやおうか、いや弁当は持つて帰らないと、昇降口へ歩いていきます。まだ授業の終わりまで余裕はありますが、重なるといちいち事情を説明するのが面倒です。靴をしまい、自分の教室へ。授業をさぼつている人がいるかもと身構えましたが、とても、静かです。黒板には数学の板書が残されています。荷物をまとめ、鞄を肩にかけ、もうここに来ることは無いかもな。風邪を引かなくとも、僕にはもうクラスメイトの顔を見分けることもできないんだ。数学の、グラフを使つた問題だつてできないし。少なくとも、この眼が治るまでは。

校舎を出ます。運動場の方へ行くと目立つでしょ。ハシバミはどこにいるのか。向こうから迎えに来てくれるのが一番ありがたいのですが、ハシバミにそんな機微を求めるのは無駄。自分で探すしかありません。運動場の方へ歩きます。ハシバミのトレードマークと言える白いチョークの、あるいは砂に書かれた文字があれば、それはハシバミの存在の確かな証人となるのです。砂場に着いて、周りを見ると、はたして文章を見つけました。何も無い空間に文字だけがうごめいているわけで、特にハシバミの美しい文章は僕の風景に花を添える模様のように見え、目立つのです。地面上に置かれた文章がパンくずのよう

僕は君を埋めた。

墓。君の墓。君はもういない。

いや、君は死んでいない。

じゃあ僕が埋めたのは、僕は戸惑う君の肩を抱く。  
僕はここにいる。僕は言う。

じゃあ、僕が埋めたのは、

何も埋めてなんかない。なぜなら、

へ埋める／という言葉が鈍く光つて見える。  
「やあ見つけたよ。ハシバミ」

ハシバミの右手をそつと捕らえる。ハシバミの手はやはり小さい。ハシバミの右手はチヨークを握っている。反対の手も上手く見つけて掴むと、僕はそれを右手で握り、ハシバミの左側に立つた。ハシバミの手は熱い。僕の熱を持つた額より熱いんじゃないか。

「じゃ、帰ろうか」

何も埋めてなんかない、なぜなら、  
帰ろう

具合悪そう

「ちょうど僕も帰りたいと思つていたところだつたから、タイミングはばっちり」

「なんか本格的に風邪引いちやつたみたいでさ。廊下なんかで寝たのがまずかつたらしい。でもまさかこんなひどいことになるとは」

家に帰つたら、休んだほうがいい

「そうするよ。悪いけど。布団は僕が使うからね」

かまわない

ここはどこなんでしょうか？運動場との位置関係からして、隅つこの並木道、通称哲学の道でしょうか。滝高の名所として学校新聞に紹介される、登下校時は最寄駅に向かう電車組の連中の通学路となるところです。

「案内してくれる？」

僕らは歩き始めました。ひとりで歩いていた時と比べかなりの安定感があります。チャイムが鳴りました。授業の終わり。

「風邪薬飲んで寝てればたぶん治るから」  
ハシバミが文字を書くために立ち止まるので、行きよりもさらに時間がかかりますが、不思議と行きほど疲れないのです。  
家の壇に文字を残す僕らへの、すれ違う人や車からの視線をなんとなく感じます。幸い咎める者はありません。

誰かに見られるのは嫌ですが、少なくとも近くに人影は無いようです。人の質感は、ハシバミ以外感じません。ハシバミは普段以上にゆっくり歩いてくれるようになります。ハシバミがずっと文字を書いていられるように、僕はちよくちよく離しかけます。

「なんで、学校に来たの？」

タキタカがどんなところか気になつた。

「よく滝高の場所判つたね」

それくらい判る

「やっぱり本当はこの辺に住んでるんじやないの？」

違う。私は遠い世界から来たの

「はいはい。別に信じてないわけじやないけどね」

ハシバミが左手を大きく振る。僕は倒れそうになる。

「そうだ。訊こうと思つてたんだけど、ハシバミが書く小説つてさ、続き物なの？」

ハシバミは立ち止まり、塀をチョークで何度も小突いてから、

判らない。でもあれは贖罪の小説だから

「贖罪……へ僕……が……君……への罪を償うということ？」

贖罪なんて難しい言葉よく書けるな。

近いかな。僕は確かに君に罪の意識がある。

でも君にも僕への罪の意識が確かにあるの

「なるほど。罪……ね」

小説が私を書かせるから、  
私自身よく判らないこともある

「難しいね」

小説を書かないと、私の世界は壊れてしまうの

「大変だ」

いつか、ちゃんと一本の小説として書きたいのだけ  
ど、  
でも断片的にしか書けない

「そのうち書けるようになるんじやないかな」

自分でも、ハシバミへの返答がどんどんおざなりになつていることが判る。僕の頭の中はコロイドが震えているし、そして実はハシバミの小説の中身に特に興味は無いのだ。今はそれよりも、自分の眼のことを見つかりさせたい。何故こんな風になつてしまつたのか。どうしたら治るのか。

その時は、あなたは読んでくれる？

「もちろん」

内容はともかく、僕はハシバミの小説を読むことが好きだ。ハシバミの文字は僕が今まで見た中で一番好きな手書き文字で、そして文字は僕の世界を導く道しるべもある。

熱が上がってきた気がします。息も上がっている。へ鈴木眼科へも通り過ぎました。もうすぐ我が家です。

もうすぐ着く

「みたいだ。ありがとね」

むやみに立ち止まるのは余計に疲れてしまうのですが、ハシバミは一定時間文字を書いていないでいると不安定になつてしまふみたいで、このことについて僕は深く知りたいと思いま

す。何故ハシバミは文章を、ハシバミの言う「小説」を書き続

けなければいけないのか。僕の質問に答える文章でも問題無いみたいだから、ポイントは文字を書くことそのものにあるのでしようか。

「ねえハシバミ。何か書いてないといられないんだつたら、僕と歩いている間もなんか小説を書けばいいんじゃない？」

誰かに見られながら恥ずかしい

「あ、そうなの」  
ハシバミにだつて恥の意識はあるのです。  
「うちに帰つたら思う存分書いていいからね。ノートも自由に使つていいし」

書く

「書く」と書かれた塀は我が家の塀で、僕らは無事に帰つてこられました。当然のことながら、鍵は開け放し……と思つたら閉まつてます。

「あれ？ 鍵かけてきたの？」

夢は観ませんでした。数時間ほど眠つたでしようか、目の周りに根が張つたようなこわばりを感じながら起き上り、周りを

「まあ閉めてもらつたのはありがたいけどさ、合鍵、あつたんだつけ？」

あつたよ

ハシバミが僕に鍵を渡す。それは確かに我が家の鍵だ。我が家

の鍵が二つ？

どうしたの？

「いや、何でも無い」

僕は自分の鍵で開場すると、中に入りました。二つの鍵を下駄箱の上の小さな籠の中に入れます。何かがおかしい。熱で頭がぼおつとしているせいかもしませんが。

「じゃ、僕は自分の部屋で寝るから、好きにしていいからね」

ね

廊下をてくてく歩き、自室の扉を開けます。何かに躊躇いて、見れば、「Don't mind if you forget me.」どうやら昨日の夜ハシバミが着ていた寝巻きが脱ぎ散らかされているようです。洗濯、しないと……。でも今は眠りたい。服を着替え、布団にもぐりこむと、目を閉じました。なんとなく、ハシバミのにおいがするような気がします。

文字に取り囲まれています。言わずもがな、ハシバミの文字でした。僕は四方を文章に囲まれているのです。

ハシバミと呼ぼうとしましたが、喉が張り付いて声が出ません。飲み物が必要です。ハシバミは、どこへ行つてしまつたの

か。立ち上がり、扉を探します。扉もハシバミの文字の侵食を受けています。文章は、僕の鼻先くらいの高さから始まり、つま先の上くらいまでびつしりと書かれています。ドアノブを探しますと、へとつて＼と横書きで書かれたものがあります。掴んでみると、やはりドアノブでした。力をかけ、扉を開きます。廊下の壁にも一面の文章。文字はすべて黒い油性ペンのようなもので書かれていて、大きさは手の平くらいで均一。台所の扉がある場所には文章が途切れています。場所があつて、そこには大きくへキツチン＼と書かれています。中央左側には、やはりへとつて＼が。僕はそれをつかんで中へ。

壁が全て黒く塗りつぶされているのは、異常に圧迫感があります。あるのは黒々と並ぶハシバミの文字だけ。冷蔵庫を探すと、へ冷蔵庫＼という文字が。

これはハシバミの優しさなのでしょうか？僕は冷蔵庫を開け、ペットボトル入りのお茶を取り出します。へ爽健美茶＼。これはさすがにパッケージの文字そのまま。とりだして、口に含みます。さて、

「ハシバミ？」

僕の声はハシバミの書く文字に飲み込まれていくよう。ハシバミは僕の家全てを、僕にとつて「使いやすい」ものにしてくれたみたいです。壁に書かれた文章。道具に書かれたそれを示す文字。少なくとも虚無に迷うことはありませんが、あまりにこれは、やりすぎ。家中を他にも見てみましょうか。僕は居間の方に向かいます。さすがに窓には何も書かなかつたみたいで、そこは相変わらずの虚無ですが、それを取り囲むように文章があります。南に面した居間の窓には小さな庭に出るちょっとした縁側があります。庭の様子は判りません。庭といつてもたいした庭では……。小さな庭で、物干し竿があつて、でも草

木が小奇麗に刈り込まれていて、今は、名前は知らないけど紫や赤の花が咲いていて、おそらくは、そんな感じになつていて、はず。庭を見つめていると、不意に網戸の開く音がして、涼しげな風が入つてきました。風だけじゃなくて、人も入つてきたようです。

「ハシバミ？」

ハシバミは僕の額を触りました。その手は土に汚れています。ハシバミは離れるとき、へ机＼に向かい、表紙に何かアルファベットで書かれているもの、おそらくはノートですが、それを掴み、開き、戻つてきました。虚空に、背景の黒文字と混ざつて読みづらいのですが、文字が浮かびます。

まだ熱がある。寝なくちや駄目

「そのつもりだけどさ。この文字たち、ハシバミが書いてくれたの？」

これであなたは何でも見える。

「何でも＼ね……。

「ありがとう。大変だつたでしょ。こんなに書くの？」

そんなことは無い。文字を書き連ねるのは、落ち着く。

「そう。じやあ僕はもうしばらく寝ようかな」

何か、食べたいものは？

「うん？ 作ってくれるの？」

買ってくる

「ありがとう。じゃあボカリと、あとはプリンとかゼリーとかそんな感じの、お願ひしようかな。風邪薬飲む前に何か食べておいた方がいいから」

判った

「お金はそこにあるのを使って良いからね」

「へ棚 二段目」とあるところを指を伸ばして触ります。そういえば、この棚はなんかアンティークのものだつた気がします。僕にはその価値はよく判りませんが、古びた木の感じがよかつた。これに文字を直接書くのは、やつぱりまずかつた。

ちゃんと寝ていること

「はいはい」

ハシバミは離れていきます。へ出口」と書かれた文字の方へ。僕はハシバミの言いつけを素直に守ろうと思います。ハシバミの残したノートを拾いました。〈Hazelnuts' Notebook〉と書かれています。デザインされた文字ではなく、いつものハシバミの几帳面な字というところが、なんだかほほえましい。僕はそれをばらばらしながら、キッチン側のへ出口を通つて自室に戻ります。僕の部屋の扉には、へ読み手の部屋」と書かれていました。ハシバミにとつて、僕は「読み手」なのです。そういえば、まだハシバミに自分の名を言つていなかつた。訊かれないと自分から言うのは何となく恥ずかしかつたのです。向

こうも名乗つていなかつたし、まあいいか。

部屋に入り、布団にもぐりこみました。さすがに服や布団には文字は無いようです。ハシバミが脱ぎ散らかした服もそのまま。ハシバミが帰つてきたら、洗濯はしてもらおう。ハシバミノートを開きます。ハシバミのことが、これを読めば判るかもしません。ハシバミは僕が勝手に読むことを嫌がるでしようか？ 僕は「読み手」みたいです。

ハシバミがこれにまとまつた文章を書き始めたのは、多分僕が風呂に入つた時からだと思います。僕との会話の跡を飛ばして、

あなたの部屋にいていいよね？

君は、死んでしまつた、わけだけど。僕は、死んでしまつた、わけだけど。君と僕、一緒に死ねたら。いや、僕はいきたい。君はいきたいと言う。僕はいきたいんだ。僕は、生きている。君は、生きている。二人は、並んでいる。二人は生きている。生きている。生きている。街はいやに明るい。僕の光じゃない。僕の光じゃない。君の光？君の光？僕は光らない。僕は光らない。僕は光らない。私はここで寝るかもわない。あなたもここで寝ればいい

布団は二枚敷ける

そう

どれ？

月明かりが照らす。桐の箱を照らす。菊の花を照らす。赤い光だ。赤い。赤い。でも君の瞳の方が赤い。そんなことは。僕は寝転んでいる。君は立っている。僕は明るい月が嫌いだ。僕も。どうして？君が嫌いだから、僕も。

地響きがする。街を大きな歓が歩いている。僕はじつとしている。君はもとから動かない。動ける君がうらやましい。君は何故動けないの？答えを口にする代わりに君

はひゆるんひゆるんと言う。違う。言つてるんじゃない。僕は奏でてるんだ。何を？歌を。君は銀色の箱の前に座つていて。二本の鉄の棒が生えた箱。君は風を操る。僕は歌を奏でる。ひゆるん。ひゆるん

プリンやゼリー。十個以上のカツプが並びます。「たくさん買つてきたね」僕はブドウゼリーを選びました。右手をさまよわせると、ハシバミがスプーンを握らせてくれます。僕は例を言つて、こぼさないようにふたを半分はがしました。ハシバミはプリンをセレクト。

「ちゃんと買つてこれたんだね」

ばかにしてるの？

「違う違う。料理したこと無いって言つてたし、こういうお使いもしたこと無いのかな、て」

…。

買ひ物くらい自分でする

「うん」

でもあなたが治つたら、一緒に買ひ物に行つてもいい？

「おかげり。ハシバミ」

玄関の扉が開く音に目を覚ました。足音が僕の部屋に近づいてきます。扉が開かれました。

「おかいり。ハシバミ」  
ビニール袋の立てる軽い音。〈Family Mart〉の文字。僕は起き上がると、壁にもたれました。ハシバミも布団の上に座つたようです。袋が音を立て、〈POCARI SWEAT〉が手渡されました。「ありがとう」

ペットボトルのふたを開け、口をつけます。身体の奥の奥に染み渡つていく冷たさがとても心地よい。あつという間に飲み干してしまいました。

「そうだね。一緒に行こう」  
こんな風な極端な買ひ方をされるのは困りますし。飲み物は五百ミリのポカリ一本しか買わなかつたようです。  
僕はブドウの塊をすくい損ねないように気をつけながら、少しづつ食べていきます。意外と食欲はあるのです。ハシバミは二つ目のプリンをあけました。

「甘いもの、好きなんだね」

嫌いではない

僕もゼリーを食べ終わり、プリンに手を伸ばします。

「こういう安物のプリンでもいいんだね」

どういうこと？

「いや、ハシバミってどこかいいとこの家人っぽいからさ」

そんなことは無い プリンは、プリン

あなたについて？

「そんなことは無い」はどちらを否定しているのか判りません。

「うんうん」  
あなたに話すことなんか 無い

「そうか……まあ仕方ないかな」

僕は立ち上がり、

「ごちそうさま。後は風邪薬飲んでまたしばらく寝るから」

僕は空のカツプを重ねると、台所へ行き、  
「流し」に置きました。甘さが喉に絡み付いています。  
「グラス」に水をくみ、風邪薬を出して飲みます。  
戻って布団に入りますと、ハシバミはまだ僕の枕元にいるようです。  
「ハシバミ。あんまりこの部屋にいると、風邪、移っちゃうよ」

あなたにとつて？

「君の書く小説によつて世界を認識しているわけだから」  
ハシバミの小説の中身ではなく、その媒体そのものによつ

私も、あなたに訊きたいことがある

ハシバミは寝る前に絵本を読んでくれるみたいな姿勢です。

て、というところが、小説家にとつては不本意かもしません。

「ハシバミの文章を読んでいて思つたんだけど、ハシバミにはすごく大切な人が一人いるよね」

ハシバミは黙つてスプーンの音をかすかにたてます。

「へ君のこと。またまにへ僕になつてることもあるけど

ハシバミは黙つています。

「へ君のことについて、教えてくれないかい？」

「おうちの人、心配してんじやないの？」

おうちの人なんていない

「どういうこと？」

私は、世界そのものだから

「またそれか。まあ少なくとも僕にとつては「世界」そのものかもしけないね」

あなたの親はどこ？

「父は僕が中学に入ったころに死んだ。母は……」

「母は。母は、どこへ？」

「おかしいな。僕は母と一緒に暮らしていた。そうだよ。母と一緒に暮らしていたんだ。ここは僕と母の家だ。高校生で、一軒家に一人暮らしなんておかしな話だ。母は。母さんは……」

僕は跳ね起き、扉を飛び出すと左に向かつた。扉。へ母の部屋へという文字。

夢の中で、僕は母の顔を思い出せない。ここは僕の家。どこの部屋？隅に、細長い木の杖。母と僕は並んでいる。雨。水が部屋の中に溜まつてくる。雷が鳴る。僕は嘔吐し、唐突にこの人は母ではない。ハシバミだ。と思う。

重たい。心臓が脚の付け根に移動したみたいだ。僕の身体に暖かいものが乗っている。熱いといつてもいくらい。硬いものが太ももあたりを軽く圧迫していく。痛い。ふとその存在が消えた。重たさはまだ残っている。腰から下にかけて、鉛のような疲労がある。その存在は、もちろんハシバミだ。ハシバミは僕の身体の上で寝転がっていたのだ。太ももあたりに尻を乗せて。重たさはまだ残っている。ハシバミの視線を感じる。ハシバミは僕を見ている。自分がさつき寝ていたところをじつと見ている。視線の先が、僕には判る。ハシバミの気配が再び強くなる。ハシバミの体温を感じる。ハシバミの息が、臍のあたりにかかるのを感じる。ハシバミは顔を近づけている？

においがする。新しいにおい。いや、違う。母の部屋にあつたにおいの一つだ。僕はこのにおいをよく知っている。僕は夢

「ハシバミは気づいていたんだね」

息が乱れる。へとつてへとつてを掴むが、開けることができない。ハシバミの手が、僕の手に重なる。ハシバミの吸い付くように湿った手。ハシバミの力が加わり扉が開く。部屋の中はぼつかりとした虚無。ハシバミはこの中に文字を書かなかつた。ああこのにおいは。母のにおいか？そうだ、母のにおいだ。でももう一つある。人間のにおいだけど、これは、違う。よろけ、ハシバミは僕の手を引き、僕はベッドに倒れ、あのにおいを深く、僕は目を閉じる。

のことを思い出そうとする。僕の母？しかしひ顔は判らなかつた。ハシバミの指が僕とズボンの間に入り込む。ハシバミは何を？ハシバミはズボンのゴムを引っ張り、それを下ろそうとする。何をしているんだ？非力なハシバミの手でも、やがて僕の性器が風にさらされている。性器はその上の毛と張り付いている。僕の性器は奇妙に濡れていて不快だ。あのにおいはより強くなる。においはきっと僕の性器から出ていて、この状況には既視感が。いやこれは自分の体験では無い。ハシバミの指は僕の性器を這う。おそるおそるといった手つき。これからハシバミがすることが僕には判る。ハシバミはその手を動かし、僕の性器は膨れ、そしてハシバミはそれを。いや、何故こんなことが判る？自分の体験では無いのに。でも僕はこの状況を何度も体験している。何故だ。何故だ。何故だ。僕は眼を開けた。へ娼年へ。母の部屋の本棚に並んだ背表紙の中の一冊。ああ。小説の中で描かれていたんだ。あらゆる小説の中で描かれる、セックスのシーン。

でも、なんで、ここは現実の世界のはずなのに、僕はフィクションの世界の中でしか存在しないはずの性交を、これからハシバミとしようとしているんだ？

僕は起き上がる。ハシバミの肩を掴み、蒲団の上に僕らは倒れ、僕はハシバミの首を両手で掴み、力をかける。セックスなんておぞましいものを。あんなに汚いことを。僕はさせない。フィクションだからこそ性交は美しかつたり胸を苦しくさせたりするのだ。現実の世界でそれをやるなんて、それは小説に対する冒流だ。ハシバミの身体が激しく痙攣し始めた。見れば、ハシバミのノートは遠く離れた位置に転がっている。黒ボールペンも。ハシバミは文字を書けない。このまま壊れてしまえばいい。ハシバミがあえぐ。声にならない声を上げる。眼下に、赤い文字が現われてくる。ハシバミの胸にあたる位置だ。そこに文字が書かれる。

でも、母の身体は、今どこにあるのでしょうか？僕は下着とズボンをはきなおしました。べたべたとして不快です。ハシバミの荒い息遣いが聞こえます。

「ハシバミ、ごめん。動搖しちゃつた。でもハシバミのおかげで僕は思い出したよ」

ハシバミはばたばたと大きな音を立てている。僕はハシバミノートと黒ボールペンを差し出すと、それをひつたくり、ペンを走らせる乱暴な音。

苦しい 苦しい 苦しい  
死ね 死ね 死ね  
死ね 死ね 死ね

あなたの母さんも

「ハシバミ、悪かつた。悪気は無かつたんだ。ハシバミに死なれたくない。ハシバミ。ハシバミ」

壊れてしまえ 消えて無くなれ 潰れろ 果てる  
私のせいだ みんな私のせいだ  
私のせいで君は死んだ サヨリは死んだ  
私のせいだ 私の言葉のせいだ

なんだ？

あなたの母さんも

ハシバミの文字が、ゆつくりと回転し始めた。僕は手を放しました。

そうだつた。僕は、母を殺したのです。今と同じようにして。失われていた記憶が、本を読みなおした時のように戻ります。

あの時、僕は半ば無理やり、実の母にこのおぞましい体験をさせられました。僕の心は、その経験に脅え、僕の身体はその恐怖を排除したのです。僕には目に見えるものすべてが汚いものに見え、汚い世界を見ないために、美しい文学だけの世界に浸れるように、僕の眼は、文字以外のものを虚無に塗り替えてしまったのです。あれからまだ一日しか経っていないなんて。

駄目だ。僕には、ハシバミになんて言葉をかけてよいのか判らない。僕は首を絞めたのだ。確かな殺意を持っていたのだ。ああ、ハシバミの首を絞めた感覚が戻つてくる。指が肉に食い込んでいき、骨をえぐるまでに達する。ハシバミの体温。ハシ

ハミの震え。いや、これは母の首の感触？母の姿が、ハシバミの存在に重なる。僕は母を殺したんだ。母を絞め殺したんだ。

なんてことをしてしまったんだ。僕は罪人だ。悪人だ。親殺しなんて人間の最低の行いじゃないか。僕はしてしまった。死ななくちやいけないのは、僕の方だ。僕の手が、刃物に触れた。ハサミだ。都合よく転がっていたものだ。これを使つて死のう。ハサミの刃の先には、少量の液体がついている。鉄のにおい。これは……。

さつきハシバミの胸に現れた文字の正体です。ハシバミは、手の届かないペンの代わりに、転がっていたハサミで血を流して、それで文章を書いたのです。僕を気付かせるために。あるいは。

僕まで壊れてしまつたのではどうしようもありません。冷静にならないと。僕は自分を責める言葉を書き続けるハシバミの方へ向かいました。ハシバミはがくがくと震え、そのことがベッドの振動で判ります。

「ハシバミ」  
僕はハシバミの肩に触れました。痙攣が一層大きくなります。

「大丈夫。僕は何もしない。心配しないで。ハシバミ。ハシバミ。ハシバミ」

僕が勝手に名付けた名である「ハシバミ」を連呼したところでどうにもならないのかもしれません。僕はハシバミの右手を握ります。右手は、血で濡れていました。

「ごめん。痛いでしょ。ハシバミ。洗いに行こう。さあ」

「ハシバミは動きません。

「大丈夫だから。ハシバミ」

僕はハシバミの右手をとつて、ゆつくりと動かし、文字を残します。ハシバミの丁寧な筆跡とは比べ物にならないほどの不

格好のものとなつてしまします。

大丈夫 私は大丈夫 私は大丈夫  
ハシバミは大丈夫 世界は大丈夫

「ハシバミは必要な存在だ。僕にとつて必要な存在だ」

私は必要な存在

「生きていていいんだ」

生きて

ハシバミが突然ペンを放すと、僕の胸の辺りに熱いものが押しあてられました。僕の身体にハシバミは両手を回していく、僕は胸の存在を両腕でそつと抱きます。ハシバミの頭の感触。ハシバミの髪は短いけれど滑らかだ。ハシバミの頬は濡れています。ハシバミは人間なんだ。僕にとつて愛しい存在なんだ。僕の陳腐な言葉に涙するいじらしい人なんだ。そう思います。ハシバミは僕の胸を涙と鼻水で濡らし、僕がその身体をゆつくり前後に動かすのに身を任せています。だんだん動悸がおさまつていきます。

「落ち着いた？ハシバミ」  
ハシバミはうなづきました。

「仲直りつてことでいいよね？僕たちは、一緒にやつていけるよね？」

ハシバミは何度もうなづきます。とても人間らしい動作です。

僕はそつとハシバミを抱えてベッドから降り、

「さあ、顔を洗つてこよう。シャワーだつて浴びたいよね？」  
ハシバミの右手にノートとペンを持たせ、左手を引いて洗面所に向かいました。ハシバミは素直に顔を洗つてあるようですが、僕は早く不快なものを洗い流したいのですが、  
「ハシバミ、シャワー浴びる？」

先に浴びて、湯気を出して欲しい

水で濡れた手で書いたため、あちこち滲んでいます。

「判つた。じやあお先に」

僕は少し迷いましたが、気にとめないようにします。今は、性器の視線を感じますが、気にとめないようにします。今は、性器はもちろん普通の大きさです。

水を流してお湯になるのを待つていて、そういうえば、まだ僕の眼はもとに戻らないな。小説や物語において、あることが原因で失われた何かを、それを克服することで取り戻すという型の話はよくあるような気がします。僕の場合は、まだ克服したとは言えないのでしょうか。どうすれば克服できるのでしょうか。まあここは現実の世界なので、なかなかフィクションのように上手くいくとはいえないのでしょうか。

僕は石鹼とナイロンタオルで、何度も何度も、念入りに性器を洗います。自分の身体についているものが、まさか実際に、小説で描かれてるよう使われるなんて。でも、現実の性交なんて、小説で描かれるロマンチックなやつでは全然なかつた。もつとおぞましく、グロテスクなものだつた。今では昨日の体験も冷静に思い出せる。小説ではあんなに情熱的で、あるいは切なくて、そして文字通り官能的であるのに、現実ではただ不快感しかなかつた。世界すべてを見たくなるくらい汚かつたのだ。それは、相手が実の母だったから?それはありえま

す。小説の中でも、近親相姦は最も重いタブーとして扱われていたと思います。

ハシバミを一人残してしまつて大丈夫でしようか?だいぶ落ち着いたようですが。僕は泡をお湯で流し、正面の鏡にへ視くと試し書きしてから外に出ました。水気をぬぐい、新しい下着をはき、汚れた下着を洗面所で洗い、ぬるぬるが無くなつたところで洗濯機に入れました。ズボンも入れて、スイッチを入れ、洗剤を一杯入れて蓋をします。もう、においは残つていません。自分の部屋で新しい部屋着に着替えます。

ハシバミは居間にいました。机にノートがあつて、そこに文字が書かれています。

「ハシバミ。早くシャワー入らないと、湯気、無くなつちゃうよ」

椅子を引きずる音。ハシバミがすれ違う時、僕の手をそつと握りました。僕も握り返します。ハシバミの手は小さく、やはり汗ばんでいて、右手の中指には硬いペンだこができています。昨日と同じように、風呂場の音を聞きます。そういうえば、下着とズボンだけで洗濯機を回してしまいました。他にも洗濯物は大量に残っています。そうでした。僕は食事担当。母は洗濯担当だつたのです。だから僕は洗濯に慣れていない。机の上に開かれたままの文章。

僕は箱に君を寝かせる。花を詰めたいけれど、街には花屋が無い。花も少ない。君の身体は冷たい。君の身体が冷たい理由を、僕はもちろん知っている。サヨリ。君の名前を呼ぶ。サヨリ。ごめん。ごめんなさい。僕のせいだ君は死んだ。君は死んだ。僕のせいだ。僕の言葉のせいだ。僕の言った言葉のせいだ。君は帰つてこない。絶対に。月が涙を流してい

る。青白い涙を流している。僕は箱にふたをする。箱の中はすかすかだけど、僕が入るには狭すぎる。僕は歌を歌う。君を送る歌を歌う。でもちゃんと歌えているか判らない。

ハシバミの心にも、何らかの変化が訪れたようです。暖まつたハシバミが居間に帰つてきました。持つていたノートを奪われ、文字が現れます。

寝なくていいの？

「ああそうだつた。でも薬飲んだからかな、けつこう調子いいんだよね」

寝なくちや、駄目

「優しいな、ハシバミは。でも大丈夫だよ。それよりやるべきことをやらないと」

やるべきこと？

「母さんのことだよ」

僕は窓の方に歩きだしました。ハシバミが僕の服をつかんでそれを止めます。

「何？ハシバミ」

行つてはいけない

「なんで？庭に、母さんがいるんだろう？」

ハシバミは、家中を文字で埋めた後、庭に出ていました。帰つてきた時のハシバミの手は土に汚れていました。帰

あなたはそれを見てはいけない

「それ、なんて書くなよ。僕にとつては大事な人だ」

見てしまふと、見えてしまう

「どういうことさ」

世界が、見えてしまう

「世界？世界つて、なんだ？」

この世界

「僕たちがいる、この世界？」

そう

「なら、なおさら見なくちやいけないんじやない？」

駄目

「どうして？」

駄目 駄目 駄目

「ハシバミ?」

馳目馳目馳目馳目馳目馳目馳目馳目馳目

「僕は行くよ。ハシバミ。止めないでくれ」

「靴を脱ぎ、窓を開けて、  
「ハシバミ？」  
動くものはありません。僕は家中を駆け回りました。  
「ハシバミ？」「ハシバミ？」「ハシバミ？」  
ハシバミがない。机の上にはノートが残されていて、  
れたままのページには、

ハシバミの手を振りきり、僕は窓を開きました。土のにおいがします。目の前には、ただ曖昧な光景が広がつていて、僕はサンダルを探して地面に下りました。一歩ずつ、一歩ずつ、土が段々と柔らかくなつていつて、ある時、ふと右足が虚空をさ

込みました。涙が穴の底の方へ落ちていきます。穴といつても

美しく、あるのでした。母は目を閉じていて、土の中で眠つて

いるよろこびも見えますか。それは間違いです。僕はこの手で母を絞め殺したのですから。殺して、庭に埋めてしまったのですから。汚いものを隠すために。埋めてしまつてから、美しい世界に逃げるために、僕は本を開いたのです。その小説が、言わずと知れた血族の物語、中上健次の「岬へだつたせいで」、より現実の汚い世界を拒絶する気持ちが強まり、僕の視界は閉ざされてしまつたのかもしれません。

僕はハシバミがあんなに嫌がっていた理由を知りました。この世界と、ハシバミの世界は両立されるものではないのです。僕にとっての世界であるハシバミは。

文字で黒々とした空間の中で、僕は

文字で黒々とした空間の中で、僕は身じろぎもできません。このノートが、壁や物に書かれた文字一つ一つがハシバミの存在の証です。でもハシバミそのものは、失われてしまつた。ハシバミは、自分の服さえも残さず持つていつてしまひました。

シバミは、自分の服さえも残さず持つていつてしましました。今から外に出れば、もしかしたらハシバミに追いつけるかもしれません。だけどハシバミは自分の意思でここを去ったのです。僕にハシバミを追いかける権利はあるのでしょうか。僕はこれからどうしたらよいのでしょうか。母もいない。ハシバミもいない。この世界で。

僕は立ち上がりました。涙が、土にほつかり開いた穴に落ちていきます。穴の中の、母の顔に落ちていきます。身体は土に隠れていて、見えません。ハシバミは、偶然か必然か判らないけども、母の顔だけを掘り出したのです。ああ。全てはハシバミのおかげだ。ハシバミのおかげで、僕は母殺しという大罪を記憶の地下脈に流さないですんだ。視界が文字以外を受けつかなくなつてからは、ハシバミが僕の世界となつてくれた。そして今、僕はこの世界を取り戻しました。今では僕は全てのものが見えます。自分の手のひらも、青い空も、全て。家に戻りま

次の日、僕は学校にもいかず、ほおつとして雨の音を聞いていました。母の顔には再び土をかぶせました。本当は、すぐにも警察に告白しなければならないのでしょうが、なかなかその気になれません。父も母も失った僕は、これから親戚の家にでも行くのでしょうか。でも、僕のうちはこれまで一度も里帰りなどしていないのです。父の葬式のときに、父方の祖父と祖母を見かけましたが、僕や母と言葉を交わすことも無く、じつと遺影を見ていたという記憶があります。母方の祖父や祖母は、まだ存命かどうかすら判りません。

いつまでもこのままでいるわけにはいかないということは、判っています。養ってくれる人なしに暮らしていけるはずがありません。本を買うことすらできないでしよう。僕はプリンのパックをはがし、スプーンを差し込みました。まだ、冷蔵庫の中にはたくさんカップが積み上がっています。ハシバミが残したもの。食べても食べても減らない気がしますが、やがて食べ尽くしてしまいます。高校をやめて就職すればいいのでしょうか。でも、今まで読書と勉強しかしてこなかつた僕に、いつたい何ができる？

ああ、ハシバミに会いたい。ハシバミと二人で暮らしていたら、どんなにいいことか。もちろんそれでも大変な生活になることは間違ひありませんが、二人なら乗り越えていける気がする。甘い夢みたいなものだけど。でもハシバミはもうない。ハシバミの言う「遠い世界」に行つてしまつたのです。ハシバミは僕を救つてくれたけど、僕がハシバミを変えることはできなかつた。僕は「サヨリ」の代わりになれなかつた。ハサヨリは、ハシバミの言葉の中に出てきた人物。ハシバミの「君」。大切な存在。ハシバミが、自分のせいで死んでしまつ

たと嘆いた人物。僕はハシバミにとつての「サヨリ」の代わりになりました。ハシバミを救える気がした。でももう遅い。僕は「Hazelnuts Notebook」を鞄に入れると、立ち上がり、服を着替えました。僕はこれから本の世界に逃げようと思います。家にある本を読んでもいいですが、読みたい本があるのです。岡田淳「扉のむこうの物語」。岡田淳さんの本は全部揃えたいところですが、お小遣いが足らなかつたのです。僕はこれを読んで、物語を書きたいと思うようになりました。これを読んだら、僕は自分の罪をちゃんと告白しようと思います。

僕は傘を持つて家を出ました。雨は見るものを灰色にしています。広い堀のあるあの家の前を通りますと、ハシバミの文章は雨でほとんど残つていません。雨が降つています。雨が降つています。僕は鞄の上からハシバミのノートを撫でました。

図書館も家から歩いて行ける距離にあるのです。市立図書館。古いにおいのする図書館。イチョウ並木が、雨に濡れて煙つています。秋になると、図書館前のイチョウ並木は黄色く色づくのです。その前に臭い実をたわわに落とすのも、またご愛嬌。僕はこの道が好きです。図書館前のこの道が。

図書館の中は空いていました。僕は傘を細長い袋に入れると、二階へ。一階は一般向け。二階は子供向けの本。中学生になつたあたりから、ほとんど二階には上がらなくなりました。今では、児童書コーナーの向かいにある、閲覧室という名の自習室しか、二階を利用するとはありません。雨に濡れたスニーカーが階段に触れて大きな音をたてます。図書館の中は暗く、湿っています。児童書コーナーの中はさらに空いていました。幼児を連れたお母さんが二組いるだけ。どちらも大人しくしています。高校生男子の出現に視線を向けましたが、すぐ逸らしました。僕は書棚に行つて、読みたかつた本をとります。

隅の席に行って、低い椅子に腰掛けます。本を開いて、ふと視線を上げると、へこそあどの森の物語 ふしぎな木の実の料理法へこそあどの森の物語 森のなかの魔女の秘密へこそあどの森の物語 森のなかの海賊船へこそあどの森の物語 ユメミザクラの木の下での山を右側に、へこそあどの森の物語はじまりの樹の神話へこそあどの森の物語 だれかののぞむものへこそあどの森の物語 ぬまばあさんのうたへこそあどの森の物語 あかりの木の魔法へこそあどの森の物語 霧の森となぞの声の山を左側に積み、へこそあどの森の物語 ミュージカルスパイズへ手に持つて読んでいる少女が僕の左斜め前に座っていました。歳は、小学校高学年から中学生くらい。年齢的にも平日の昼間という時間的にも、ここに座つているのは場違いです。少女は、背が低く、黒いローファー、黒のニーソックス、赤いチエックのスカート、青い血管の浮き出た白い脚、黒いジャケット、眼帯をつけた熊のコミック調の線画が描かれた白いシャツ、左胸にヘ Hazelnuts Company というブランドのロゴの入った黒い長袖のジャケット、髪は耳にかかるくらいの長さで、少し茶色がかつていて、前髪が眼にかかるつて、顔は、鼻が少しつぶれていて、口は小さく、白い前歯が少しだけ覗き、頬は薄い桜色で、顎の先に一個だけ茶色いにきびができるていて、輪郭は丸く、眼は大きいという印象も小さい印象を与えることなく、目尻はこころもち上がつていて、まつげが長く、顔のパーツ一つ一つは決してよくは無いが、全体のまとまりがある。少女の視線は本にまつすぐ向けられていて、僕の視線に気づかず揺るがない。本を持った手は小さく、薄く光沢を持つていて、右手の中指の人差し指の方の側面が膨らんでいる。机の上には他に、広げられた白紙のノート。その上に転がっているシャーペンがある。

僕は視線を本に戻すと、文章を追いました。実際、何度

も読んだから文章の流れは判っているのです。でも、やはりころが落ち着いていきます。主人公がへ落ち込みいすへに座つたあたりで、少女がヘミュージカルスパイズへを読み終え、本の山に重ねたのを視線の端で捕らえました。少女はちらりと視線を上げると、僕に視線を向けました。僕は文字を追つていますが、少女の視線はいやにまつすぐ僕にぶつかってきます。なんでしょうか。そんなに高校生男子が昼間つから図書館児童書コーナーにいるのがおかしいのでしょうか。僕は顔を上げました。目が合います。少女の眼は大きく開き、軽く開いた唇はひくひくとしています。ちょっと異常な表情です。驚き？忘我？恐怖？

「どうしたの？」

少女ははつと虚をつかれたような顔になると、首を振つて、本に視線を戻し、へはじまりの樹の神話へを持ち開きます。僕も自分の読書に集中します。僕と少女のページをめくる音と兩音だけが聞こえる、とても静かな世界です。無音よりも静かなのです。今や、部屋の中には僕と少女しかいません。やがて、物語は終わりました。僕と君は同時に本を机に置きました。

「ねえ。岡田淳、好き？」

僕は少女に、なんだか奇妙な親近感を覚えるのです。平日の昼間、雨の日の図書館、児童書コーナー、場違いな年齢、岡田淳の本。

少女は答えずに、僕を見ると、にいつと、少し怯えたようにな笑みを浮かべます。少女は指で、へだれかののぞむものへだへとヘミュージカルスパイズのヘイヘスとヘユメミザクラの木の下での木へを順番に示しました。

「へえ。実は僕も岡田淳が大好きでね。彼の本は何度も読んだな」

少女は黙つたままうなづいています。なんだかひどく物静か

な女の子。

「ああ。読書の邪魔してごめんね。僕はそろそろいかないと  
少女は首をかしげます。

「罪を告白するんだ。罰を受けるために」

僕は立ち上がりました。少女は慌てたように立ち上がりま  
す。少女は背が低く、僕の胸ほどまで。少女は僕の手を握りま  
す。少女の手のひらは汗ばんでいます。普段は不快な他人の汗  
が、このときばかりはよいものに感じます。不思議。少女は僕  
を止めようとしている？何故？罪の告白という言葉に不穏さを  
感じたから？

僕には与えられた役割があります。それは、君の声  
を取り戻すことです。君は声を、深い水脈の奥の奥  
へ落としてしまったようなのです。僕は君がすっか  
り眠ってしまったことを確かめてから、城を出まし  
た。

旅の途中、僕は君の故郷の街に着きました。中央  
に大きな桜の木がある小さな街。木の根元にはこち  
んまりとした教会があり、中に入ると、中央には桐  
の棺があります。棺には月明かりがあたつていま  
す。教会に和風の棺というのもおかしな話ですが、  
僕は近寄って蓋についた小窓を開けると、少女の顔  
が現れました。少女の名はサヨリ。かつての僕にと  
つての君。片割れにして唯一無二の存在。今の僕に  
は彼女と昔の僕の間に何があったのか判りません。  
ただ、君は自分のせいではヨリを亡くしてしまった  
と嘆いている。僕だけ判らないというのは寂しい。  
やがて、ぽつかりと開いた穴にたどり着きました  
。穴の底からまがまがしい空気が溢れ出ているよ

「どうしてとめようとするの？」  
少女は右手を離すと、机の上のシャーペンをとり、ノートに  
文字を記します。

もう一度、私があなたの世界になることはできない  
の？

「ハシバミ」

うな気がします。僕は穴の底を見ることに本能的な  
恐怖を覚えますが、なんとか中を覗き、そのまま飛  
び込みます。

地下水脈の果てには、扉が一個ありました。苔む  
した岩肌の壁の中で、場違いな茶色く軽い木の扉。  
扉は梓と一緒になつていて、どこにつながるという  
のでもなく直立しています。扉だけの扉です。僕は  
それをためらうことなく開きます。それは、城の中  
の君の部屋につながつていて、ちょうど朝日が差し  
込むころで、君は目を覚ました。

言葉を取り戻した君は、喜びの歌を歌います。僕  
と君は、二人しかいないダンスホールで踊り続けま  
す。ここは、二人だけの世界。僕と君のための、美  
しい文学の世界。永遠に続く、完璧な世界。僕と君  
は、この心地よい世界で、ゆるゆるとまぐわってい  
く。

ひつそりと置いてあるこの冊子を発見し、手に取り、そして、最後まで読む。そしてここまで読んでいただき、ありがとうございます。

という訳で、編集後記です。

当初は三月発行予定だったこの冊子も、なんと五月になってしまった。本当に驚きです。と述べたところで、編集作業を一人でやつて感じたこと。それは、「不測の事態が起こつたらやばい」ということです。今回、危うく編集作業が続行不可能になるかと思うようなことが複数発生して大変でしたが、何とか完成にこぎ着けられました。よかったです。これも文芸部の皆さんの協力があつたからこそできたことと言えるでしょう。やつたねつ☆

大事なことを書き忘れていました。

今回から、文芸部誌「表現」は自家製本です。今まで業者の方に頼んでいました。それを部員自らの手で印刷・製本をして、経費削減に努めることにしました。そのため、少々（もしくはそれ以上）装丁が荒いかもしれません、末永く大事にしていただけないと幸いです。

最後にもう一度。

皆さんありがとうございました。

二千十一年四月二十七日

宇都宮高校文芸部 編集担当

渡部友教  
わたなべともゆき

## 奥付

### 文芸部誌「表現 8 7」

2011年05月02日 初版 発行  
2011年09月11日 PDF版 発行

著者 宇都宮高等学校文芸部

発行者 宇都宮高等学校文芸部

印刷・製本 宇都宮高等学校文芸部

〒320-0846  
栃木県宇都宮市滝の原3丁目5番70号

MaiTo utakawriters@gmail.com  
Twitter @utkwriters  
HomePage <http://utkwriters.iza-yoi.net/>  
Weblog <http://utkwriters.sugo-roku.com/>

Thank you for reading!